

## これまでの審議における具体的な意見

※( )の数字は審議会の開催回

### ○高槻市の子どもたちにつけてほしい力

- ・非認知能力の育成は、幼児期の学びの環境の充実が影響する。数値化されない能力を伸ばす教育に力を入れて取り組むべきである。(5)
- ・協調して歩みを進める、協働するということに関しての学びを深めることが、より必要な時代になっている。9年間を一緒に学ぶことによって、知識以外のものが学べる利点がある。(5)
- ・自ら育つという視点が、これから大切である。子どもたちが自分で選んで、考えて、自分で遊べるという環境を、小学校と中学校は続けていってほしい。(5)
- ・生活習慣が変わる中で、コミュニケーション能力が低下している。人と関わる力、対話する学びを大切にして、強化してほしい。(5)
- ・コミュニケーションはすごく大切である。同じことを相手に伝えようとしても、言葉が違くと相手の受け取り方は全然違ってくる。そういう意味でも、コミュニケーション能力は、こじれたときに解決する、乗り越えていける能力である。(5)
- ・将来子どもたちが今住んでいる地域を担っていけるように育ててほしい。  
親と先生以外とふれ合ったことがない子どもや失敗を乗り越えた経験があまりない子どもが多い。総合的な学習の時間や特別活動などに十分に時間をかけられていないのであれば、(地域の活動でも)いろんな子どもたちとの交流の中で、協働することを目指していきたい。(5)
- ・高校受験に向かってだけでなく、なぜ学ぶのか、今学んでいることがどのように生かせるのかという学ぶ意義を伝えて、学んでいることが世の中を変えていくことにつながるという意識を育てていきたい。高槻が掲げている「社会参画力」のとおり、子どもたちの自己実現とよりよい社会をつなぐために、社会の当事者としての意識を育み、自立した学習者となるように力をつけられる学校にしていきたい。(5)
- ・子どもたちに一番求められているのは、主体性ではないかと思う。受け身でなく、自らが学習を組み立てていくという活動も増えている。(5)
- ・学校教育の役割は、学力を育むこと、人間性を涵養することとあった。学校としては各教科等でつきたい力を着実に定着させることが大切であると感じた。コミュニケーションにおける言葉の力は大事であるが、子どもたちの語彙力にも課題はある。(5)
- ・自分で課題を見つけて解決することを経験していく問題発見力や生涯にわたって学び続ける力の基礎をつくることも大切だと感じた。(5)

## ○義務教育学校制度導入に期待される効果

### <義務教育9年間を一貫した系統性・連続性のある教育の実施>

- ・義務教育学校にしかできないこととして、既成概念含めてリセットできることがある。
- ・一人の校長の学校運営により、前期課程・後期課程を俯瞰することができ、自ずと教育課程には一貫性が出てくる(4)
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中に「社会生活との関わり」「自立心」が挙げられている。就学前の教育でも育てた力を小学校につないで、義務教育9年間で伸ばしていくという雰囲気がうれしい。(5)
- ・各校に校長がおり、それぞれの学校の特色を出していくとなると取組に差が生じる実態はある。小学校から中学校への連続性を考えると、一人の校長が9年間の教育課程を編成できることが魅力である。(5)
- ・防災教育や環境教育など、いわゆる教科の枠に収まらない学びを考えたときに、9年間の連続した教育ができるというのは非常に重要ではないかと思う。(6)
- ・(小学校での取組を)「中学生なら、きっこう発展させることができるのではないか」という校長の考えが、一つのプロジェクトを小中学校で展開していくことの意義や魅力、価値というところにつながっていくと思う。(6)
- ・9年間を通して子どもを見ていくことはすごく大事なことである。児童から生徒を含めた9学年が一堂に会することの大切さも感じている。(6)
- ・(学力の向上と市民性の育成について)両方というのはやはり補い合うもので、片方だけが伸びることはない。お互いが相補的な関係にあるということを考えたときに、そういう学びが広く9年間で広がっていくところに、お互いがお互いを引っ張り合えるようなところがあるのかなと思っている。(6)
- ・義務教育学校になると、各学年の人数が今より増えるだけでなく、縦の繋がりについても豊かになるような取組が設定しやすくなる。(7)

### <児童・生徒に対する途切れのない指導>

- ・(視察を通じて)職員の仕事観が変わったことや、やりがいを感じて仕事をしている様子に感動した。(4)
- ・教員同士が学びあい、切磋琢磨している姿を子どもたちに見せることができる環境になっている。「子どもにとって最大の教育環境は教員」という言葉があるように、子どもたちが人と人とがつながる大切さを実感し、「生きる力」をつけていくことができる。(4)
- ・9年間の子どもの育ちと学びをつなぐ小中の文化の融合は、さまざまな部分で授業改革にもつながっていくと思われる。(4)
- ・メリットは、教育課程の一貫性、縦のつながりの良さ、教員の学びあいなどである。(4)

- ・一つの組織になることで、校種を超えた教員のコミュニケーションは増え、学校のビジョンを共有することができるなど、連携型小中一貫教育で十分にできなかったところを改善し、教職員集団のチームワークを高め、教育の質を上げていける。(4)
- ・子どもが減少した小規模な学校では、教員の数も減るため、教員同士が学び合う機会も減っていく。義務教育学校では、子どもの9年間の成長を見取っていくために、教員同士が学ぶ機会も増え、小学校の教員が中学校の専門的な指導を学ぶことも充実させられる。(5)

#### <豊かな人間性の醸成>

- ・通常の学校ではイベントである小中の交流が、9か年の義務教育学校では通過点として日常の交流になっていると思う。柔軟で魅力があり、なおかつ可能性を考えることができるカリキュラムづくりを展開できる。(4)
- ・多様な大人・異学年の子どもとの関わりが広がる。その環境の中では、よいことばかりではなく諍いなども増えることもある。そこで、お互いの折り合いをつける機会も増えることになる。そういった総合的な勉強そのものが、人間の根っことなる一番大事なところを育てていく栄養素となる。それが日常的な環境としてある義務教育学校の教育は、大きな意味がある。(5)
- ・学校は、「他者との折り合いを学ぶ」という重要な役割がある。学校では、発達段階に応じた人との関わりを学んでいる。多様な子どもたちが集う義務教育学校では、豊かな心の育成という観点でも優位性がある。(5)
- ・小さな学校でも子どもたちの成長はあると思うが、大きな学校であれば、異質な集団で交流する力がより高まる。(6)
- ・一つの中学校に二つの小学校という「一中二小」よりも、義務教育学校として一つにすることで、クラスは各学年減ったとしても、1年生から9年生までの9学年の縦の繋がりといいものは広がる。たくさんの仲間や多様な人と関わり合えるという意味でも、そういう機会を保障するという意味でも、義務教育学校になる意義をイメージすることができた。(7)

#### <地域との協働の強化>

- ・コミュニティ・スクールの機能の強化も期待でき、学校を核とした地域との協働が充実する。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」にある「社会との関わり」については、地域の身近な人との関わりや地域の親しみを感じ続けながら学べる点で、優位性がある。(5)
- ・地域とともにある学校の機能を充実させていけると感じた。今社会や国が学校教育に求めていることである「持続可能な社会の創り手」を育てることは、地域の活性化にもつながっていくものである。(6)

## ○義務教育学校制度導入における留意点

### <学校運営>

- ・校長のマネジメントの範囲が広がり、教育効果を高める可能性について考える際に校長の力量が問われることになる。(4)
- ・小中学校をくっつけたという考えから9年間を一貫した一つの学校であるという考えに至るまでの難しさが課題としてうかがえた(4)
- ・義務教育9年間の出口である15歳の姿というのを思い浮かべて、15歳の学力に小学校も責任を持っていくということを意識しなければいけない。(5)
- ・幼児期の教育は、興味のあるもの、好きだと感じるもの、やってみようと思うところから始まり、主体性から始まるといえる。その中で自立する基礎を養っている。義務教育学校制度を導入することで、環境を通して学ぶことも、教職員が一致してつなげていけるとよい。(5)

### <安全・安心な学校づくり>

- ・どの中学校区に設置されるとしても、通学路の安全性を保障する市の取組はぜひ継続してほしい。通学路の安全指導を起点に、9年間を見通した安全教育を展開していきるといい。(7)
- ・子どもたちの交通ルールを守って歩く機会がすごく減っているため、就学前から、通学指導、交通ルールなども身につけること、歩く体力をつけることなどは心して取り組んでいきたい。(7)
- ・子どもの好奇心にアプローチをして子どもたち自身で安全を守ってもらうことは大切だと思う。通学路のことを一番よく知っているのは子どもたちであり、セーフティボランティアの減少はどうしても避けられない社会状況であると思うので、子どもたち自身が集団登校することによって生まれる新しい安全意識もあるのではないかと感じている。(7)
- ・防災の話について、特に高槻の場合は、水害の際は使えないという小学校、中学校がたくさんある。せっかく義務教育学校を建てるのであれば、どう対応できるのかということも踏まえた設計があると非常にいい。(7)

### <地域との関わり>

- ・学校を9年間だけの付き合いだけでなく、長い付き合いができる地域の拠点として運用されていることが大切な点だと思った。(4)
- ・地域とつながり、地域・保護者の方が、学校や子どもたちの応援団として一緒に「地域とともにある学校」づくりの取り組みを考えることで、義務教育学校制度がより充実していく。(4)

- ・学校は避難所になることを考えると、地域の気持ちも踏まえて考えていくことが必要。  
(5)
- ・地域に対して、連携型の成果等を伝えていかないと、通学路を始めとした地域への説明にもつながっていかない。コミュニティ・スクールも「よく分からない」という声が多い。説明をして理解をしてもらうことの積み重ねの上に、今後の義務教育学校があると思う。(5)
- ・実施校区など具体的な検討が進んでいく中で、当該の地域には、理解を得ながら説明していくことを大切にしてほしい。(5)
- ・学校運営協議会制度の導入の中だけでは、9年間の縦の接続を十分に行うというのはなかなか難しいという報告があったかと思う。3割の先生が、それぞれの学校がどんなことやっているのか分からないという話もあった。そのため、義務教育学校制度を導入する際には、学校運営協議会制度と併せて機能させることで、より充実したものになると思った。(6)
- ・これから新しく通学路を選定する際には、やはり学校だけではなく、それを見守る地域の方の援助が必要である。(7)
- ・学校という機能のみならず、地域の一つの拠点という観点が大事だと思う。視察先は、学校に隣接しているほぼ学校の一部のような形で、公共の施設としての機能を持っていた。多様な方々が学校を核として関われる、1年生から9年生までの9年間もちろん、それ以外のときであっても多様な人が関われる、使える、利用できるというのは非常に大事ではないかと思った。(7)
- ・日常的に「どうぞ使ってください」という場所になっているということは、本当の意味でのインクルージョンを進めていくという点でも非常に大事ではないかなと思う。日常的に閉じていないということは、非常に重要ではないかなと思う。  
ぜひ、防災を考えていく上では単なる学校ではなく、地域の一つの中核となるような施設として構想されると、いろんな人にとって、できてよかったなという施設になるのではないかと思う。(7)

#### <学級規模>

- ・1学級の子どもの人数だけではなく、学校全体の人数が少ない方が、一人ひとりに応じたきめ細かい教育ができるよさがあると捉える方もいるかもしれないが、子どもの人数が少ないということは、子どもの多様な関わりが少なくなるということにもなる。学級数についての話があったが、子どもの数が少なくなると学級数も少なくなり、その結果として学校に配置される教師の数も減ってしまうため、担任の先生以外の先生との交流の機会も減っていくということにも繋がる。結果として、多様な他者と交流する機会が減ってしまうのではないかという心配もある。  
また、子どもの人数が少なくなると、すべての学年が1学級になってしまう、もしくは、複数の学級があっても1クラス当たりの人数が少なくなってしまうため、人間関

係が固定化する可能性もある。(7)

- ・(子どもの数が)あまり多すぎると、きめ細かな学習指導や9学年全体で活動していくときに、その人数の多さが障壁となり、なかなかスムーズに進められないということもある。この推移を見ていると、少子化ということもあり、多くて各学年2学級ぐらいかと見受けられるが、2学級ぐらいが適正であり、小と中の連携をもう少し緊密に取れるのではないかなと思う。(7)
- ・(小さな規模の学校でも)校務分掌や委員会の数は変わらないため、一人あたりで持つ委員会の数が増えるという状況にもなる。

#### <設置形態や施設の工夫>

- ・施設一体型の学校は絶対に良い。(2)
- ・教員の学びあい是一体型であるから可能であり、意思の疎通は難しく併設型や分離型では可能か疑問なので、やるからには一体型がよいと強く感じた。(4)
- ・一体型ではないが、校区が支え合って盛り上がっていた経験上、分離型になっても一体型の心意気を引き継いでほしい。(4)
- ・施設面における多様な子どもへの配慮については、部分的に取り入れることで実現できるものではあるかと思う。ただ、部分的に取り入れるよりも、新しい教育観が校舎全体から感じ取れて広まっていくことがより良い環境かと思う。ぜひ、予算の許す限りではあるが、高槻市も新設の義務教育学校があればと望んでいる。(7)
- ・学び手である子どもたちを主体と考えたときに、教師が説明する以外の多様な学習形態の工夫というのにも必要になる。(学習空間の例のように)子どもたちの豊かな表現や、そういった機会を生み出せる環境として、こんなところがあればいいなととても魅力を感じた。多様な他者と関わる機会として、異年齢や地域の方との交流を考えたときに、こういう学習空間があれば子どもたちの可能性を広げる学習活動に繋げられるのではないかと思う。  
こうした学習空間を共有することで、教育観が随分変わっている、変化しているということをお大人も子どももお互いに関心を持って感じ取ることができるのではないかと思う。(7)
- ・物理的な制約がなかなか大きい学校においては、「新しい学び」というのはすごく展開しづらいと思う。(7)
- ・視察に行って、やはり施設も大事だなと正直感じた。人と人を繋げる仕掛けがちゃんと施設にある。そういった施設を整備することで、可能になっていく、さらに可能性が広がるということもあるのだなということを勉強した。(7)
- ・防災という観点で、学校の数が増えれば、地域の避難所も、数も変動していく。緊急時の指定の避難場所ということもしっかりと整理し、もし新しく建てることになった場合、この義務教育学校における防災の仕組みということも視野に入れて考えていただきたい。(7)

- ・とても広い空間で、いろんなところでいろいろなことが一度に起こるということは、支援が必要な子どもにとっては、混乱を起こしてしまうのではないかと危惧している。視察した豊中の施設のように、空間も多様化してほしい。狭い空間や、落ちつける、クールダウンできる空間があるといい。一つの教室から幾つかの空間に分けることができるような工夫をして、どの子どもも安心して9年間通うことができ、一日を過ごせるという空間があるとありがたい。(7)
- ・デザイン的にはすごく画期的で、カッコいいものということで新築当時はよかったのだろうが、メンテナンス等を考えた、維持管理をしっかりとしやすい観点で設計しないといけない。(7)
- ・公立の学校は小学校も中学校も子どもたちが清掃するという点も考えておかないといけないと思った。限られた時間の中で子どもたちが行うので、細かい箇所の清掃はできない部分もある。先ほど委員のご指摘があったように、メンテナンスの問題、設備が壊れる原因にも繋がっているのだろうと思う。子どもたちが清掃するという前提で、施設を設計する必要があると思う。(7)

#### ＜設置の推進に向けて＞

- ・今までの研究成果をよりブラッシュアップしていく土台として、現存している中学校区を大切にしていける必要がある。(2)
- ・一度にすべての学校を義務教育学校とすることは現実的ではない。(過去の)答申にあるように、リーディングスクールとして一校を設置した後、取組を広げていける必要がある。(5)
- ・義務教育学校を作ったらもうそれで終わりではなく、義務教育学校のよさを生かしていくために、教職員の取組、市の取組を考えていかなければならないと思った。(6)
- ・子どもが、「ぼくたち、わたしたち愛されているよね」「大切にされているよね」と、実感できるような取組であることが大切だと思っている。また、人と関わって互いに学び合える、「わたしもあなたも一緒に成長したよね」と思える取組であること、どんな小さなことでも「役に立っている」という気持ちになるような取組が計画されていったらいいと思う。(6)
- ・我々は公教育を担っているということが非常に重要なことである。社会的、経済的背景に関わらず、すべての子どもたちに学力を保障したいという説明があったが、生まれ育った環境に関わらず、すべての子どもたちに等しく学ぶことができる場を提供するというのが、やはり公教育の非常に大切な役割である。  
その中で、様々な人と関わりながら、人を変えていったり、社会を変えていったり、自分を変えていったりする中で、自尊感情や自己有用感というものを育てていければということを感じた。小中一貫教育のさらなる充実を通じて、その社会的使命を果たしていければと思った。(7)

- ・今後、先行して設置する中学校区を考えていく際には、子どもの数が減少している地域の実態も踏まえて、子どもの数の推移も観点の一つとして考えてほしい。(7)
- ・この義務教育学校に対しての注目が非常に高い中、やはり皆さん不安を抱えている。義務教育学校を作ること、マイナスに走るようなものがあるのではないかという観点や危機感というものを持たれている。高槻市バージョンでいいと思うので、選択肢をイメージできるような資料を提供することで、否定的な意見を持たれる方にも、何かしらポジティブなイメージが生まれてくることがあるのではないかと。  
最終的には地域の理解が一番大きなポイントにはなると思うので、しっかりと合意形成していく過程として、そういう情報収集も含めて示してほしい。(7)

#### ○今後さらに検討が必要な課題

- ・規模が大きくなりすぎないかということが一番心配。どのような規模の義務教育学校を作っていくのかということもこれからの検討課題である。(2)
- ・子どもたちが育っていく上での望ましい学校規模の観点も、子どもたちへの教育的な影響を考えて検討していく必要があると感じた。(6)
- ・通学路に関する話があったが、学校の一番は子どもを大切にすることだと思う。物理的にも精神的にも子どもが喜んで通うための用地の選定は非常に難しい。(5)
- ・将来的に高槻市内の様々なところで義務教育学校を展開していくことを考えると、まだ大規模になりそうな校区と、中規模になりそうな校区と、小規模になりそうな校区では、それぞれの雰囲気や教育のやり方、学校運営のあり方などはどう考えても同じにはならない。いくつかの規模に応じた義務教育学校のあり方も検討しておいた方がいい。(7)
- ・(通学路について)非常に危険なところをどうするか。(子どもがルールを)守らないことで事故が起きやすくなるなど、様々な面も考えていかないといけない。(7)
- ・跡地の利用も、目を向けていく必要がある。それは防災の意味でも、或いは、地域の活動などの様々な形で集まる機会があったとしたら、それをどう扱っていくのかということも含め、セットで考えていく必要もあるのかなと思った。(7)
- ・公共の施設が連携しながら学校が発展しているという例は全国的にも大いにあるかと思うが、本当にそれが機能をしているという例も、教えてほしい。(7)